

なんと川西が日本で初めてなんです

ふちんかん

川西市には意外な「日本初」がある。

それは……『日本で初めてトロリーバスが走った町である』

(・∀・) つ 〃 〇 ^エ-^エ-^エ-^エ-^エ-^エ-^エ-^エ-^エ-

トロリーバスとは、『無軌条電車』といい、架線から電気を取り通常の路面を走る電車のことである。線路が無いことから「架線からの電気で作るバス」と言った方がわかりやすい。バスと違って排気ガスがでない、燃費が良いなどの良い点がある反面、架線のある場所しか走れないという鉄道独特の制限もある。現在では、立山黒部アルペンルートの扇沢から黒部ダムまでの間(ほとんどトンネル)を走っているのは有名だ。

さて、川西にトロリーバスが走ったのは、昭和3年。現在の川西市花屋敷を起点とし、川西市飛び地の満願寺付近を終点とする約2キロの区間を30人乗りのトロリーバスが走っていたのだ。温泉を中心とした遊園地へのアクセスという構想で立ち上げられた鉄道だった。会社名は「日本無軌条電車」。名前からして「無軌条」ぶりが心配されるが、その通り、開業からわずか約2年半の短命だった。



昭和36年まで阪急川西能勢口駅と雲雀丘花屋敷駅の間あたりに「花屋敷」駅があった。この花屋敷駅跡から北に50mほど狭いバス道を進むと、急に道幅が拡がり不必要に思われるほどの広場にでる。ここがトロリーバスの起点だった「花屋敷」停留所跡のようだ（現在の阪急バス花屋敷停留所）。ここにはターンテーブルがあったそうだ。ここから標高差100m・直線距離1500mを約2kmで結ぶ。かなりの勾配率である。当時のバスでは登り切れない勾配をなんとか登るためのトロリーバスだったようだ。途中のS字カーブを含め、路面は斜面にあわせて屈曲しているものの、意外なほど直線区間もあり、鉄道用の道路であることが今でもそこはかとなく感じられる。

現在の長尾台あたりまで急坂が続き、そこを越えると山あいの盆地に入り路線もなだらかに下っていく。盆地の中心あたりが終点の「花屋敷温泉地」（現在の阪急バス満願寺前停留所）。もともと明治の末頃から温泉が経営されていたところに、トロリーバスとセットで遊園地や動物園などの娯楽施設が運営されはじめたようだ。

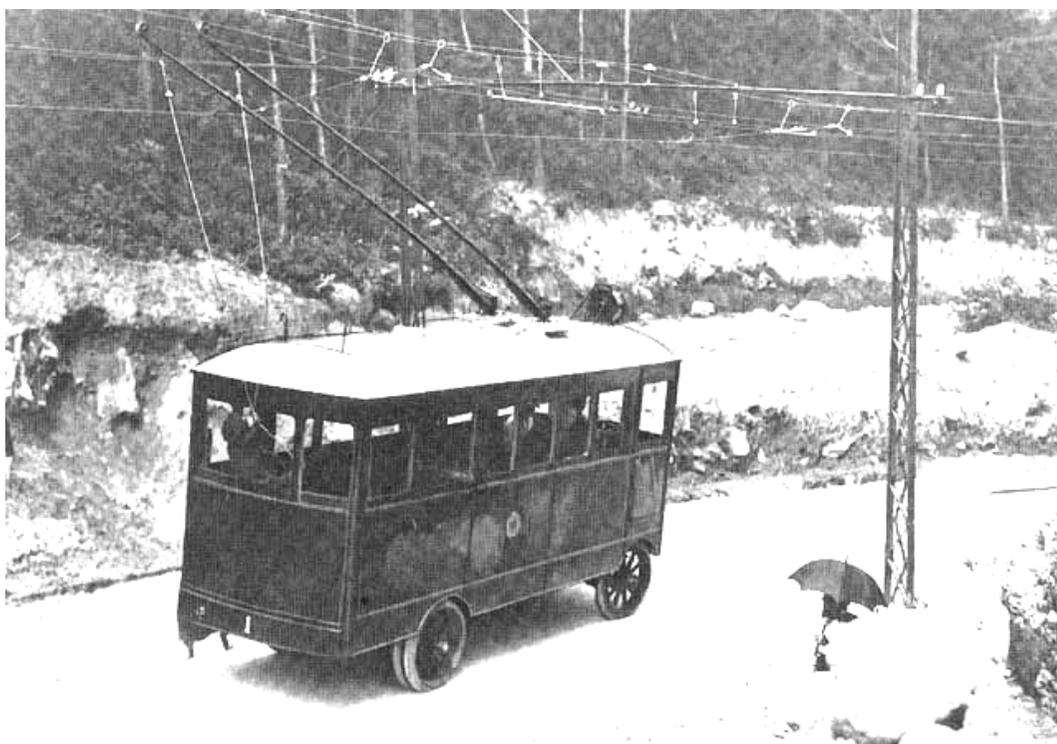
新花屋敷

株式会社花屋敷温泉地



これらの施設は現在の満願寺の南西に広がっていた模様だが、いまでは跡形も残っておらずゴルフ場や住宅地になっている。終点の花屋敷温泉地停留所はループ線になっていたようで、たしかに満願寺の門下には扇形に広がる道路が残っている。

さて、そのトロリーバスであるが、ソリッドタイヤという堅いゴム製のタイヤを履いていたせいか乗り心地が悪く、振動で車両故障が起こることもあったという。また架線から外れたりトロリーポールが外れたりして走行不能になることもあったようだ（乗客が押して戻したりしたらしい）。



最終的には経営不振で昭和7年には運行停止→廃止となり、日本初のトロリーバスはあっけなく姿を消すことになった。だが鉄道開設と同時に開発された宅地は現在でも緑豊かな住宅街となっているし、鉄道周辺に植えられた桜は立派な桜並木になっている。昭和初期の冒険ともいえる鉄道敷設の名残をしっかりと残しているようだ。

おまけ 阪急雲雀丘花屋敷駅の由来

もともと箕面有馬電気軌道（現在の阪急宝塚線）開通時からあった駅は「花屋敷」駅だった。先述のように現在の雲雀丘花屋敷駅と川西能勢口駅の間にある花屋敷踏切付近だったようだ。大正5年、雲雀丘の宅地開発と同時に私駅のような形で「雲雀丘」駅が誕生した（現在の雲雀丘花屋敷駅のあたり）。赤屋根にステンドグラスのはめ込まれた窓、ビリヤード台の設置などおしゃれな駅舎だったという。

昭和3?年、阪急側が駅間が短いことを理由に花屋敷駅を廃止する方針を打ち出した。しかし花屋敷地区から猛烈な反対運動が起き、提灯行列などを行い運輸大臣まで巻き込んだので大紛争となった。最終的には花屋敷自治会長と雲雀丘自治会長が「じゃんけん」をすることで決着をつけることになったという。勝負は雲雀丘自治会長が勝ち、昭和36年に現在の位置に「雲雀丘花屋敷」駅とすることで一応の解決を見た。

現在の雲雀丘花屋敷駅周辺の半分近くは川西市になっているが、これは川西市が宝塚市の中に入り込んだ形になっている。じゃんけんで負けて駅を失った花屋敷地区への配慮なのかもしれない。

